

## 「見えざる手」と「コンヴェンション」

－ スミスとヒュームの秩序生成論 －

柴田徳太郎

(東京大学大学院経済学研究科)

はじめに

地球環境問題の深刻化は、限られた資源を現役世代間で奪い合うという問題だけに止まらず、現役世代と将来世代の利害の対立という問題を引き起こしている。人間はどのようにしたら対立を克服して協力が可能なのだろうか。この問題の解決を「秩序は自生的に生成する」という観点から論じようとする有力な考え方がある。その典型がハイエクの議論である。ハイエクは設計主義を批判し、自生的秩序論を高く評価する。そして、前者の思想的源流をホッブスとデカルトに求め、後者の源流をスミスやヒュームに求めている。だが、この対比は適切なのだろうか。ホッブスとデカルトの世界観が根本的に異なるのと同様に、スミスとヒュームの世界観も根本的に異なる。スミスの自由放任論の背後には、理神論の調和的世界観がある。この世界観を象徴するキーワードが「見えざる手」である。これに対して、ヒュームは理神論を批判し、穏健な懐疑主義に基づく制度の自生的生成論を展開する。こちらのキーワードは「コンヴェンション」である。スミスは、西欧の正統思想を継承する理神論的なアプローチを採り、ヒュームは、西欧の異端思想を継承する生物学的で自生的秩序生成アプローチを採用している。本稿の課題は、両者の世界観と秩序生成論を比較検討することにある。

### 1. スミスの秩序生成論

#### (1) 道徳哲学の諸体系について

スミスは、『道徳感情論』第6部において、2つの問題に関して諸学説の評価を行っている。第1は「徳はどこにあるか」という問題である。この問題に関しては、3つの説がある。第1の説は、「徳は行動の適宜性 (**propriety**) にある」という考え方で、プラトン、アリストテレス、ストア学派のゼノン、そして理神論者クラークの説である。第2の説は「徳は慎慮 (**prudence**) にある」という考え方で、エピクロスやヒュームの説である。第3の説は「徳は仁愛 (**benevolence**) にある」という考え方で、ハチスンの説である。この3つの考え方のうち、スミスは第1の説 (適宜性) を最も高く評価し、第2の説 (慎慮) を最も低く評価する。

第2の問題は、「是認は精神のどんな力または能力によってわれわれにすすめられるか」である。この問題についても3つの説がある。第1が「是認の原理を

自愛心から引き出す」考え方で、ホッブス、プーフェンドルフ、マンデヴィルなどの説である。第2が「理性を是認の原理とする」考え方でこれもホッブスの説である。第3が「感情を是認の原理とする」考え方で、ハチスン、ヒュームの説である。この問題に関してスミスは第3の説を支持する。

第2の問題に関して、スミスは道徳を理性からではなく感情から引き出してくる考え方を支持し、ヒュームと同様に **sympathy** から道徳を説明する。しかし、第1の問題に関しては、道徳の基礎を公共的効用 (**public utility**) に求めるヒュームを批判し、適宜性を重視する。その際に強調されたのが、ストア学派や理神論の世界観であった。

## (2) 「適宜性」とは何か

では、「適宜性」とは何か。それは、「他の人々の目をもって見る」ことによって「我々自身の利害」や感情を抑制すること、そのことが観察者には「適切 (**proper**)」に見えるということである。そして、この「適宜性」の感覚が公共的効用に資するというのはあとから考えられたものであり、客観的な観点を持って行動する人々はそのことは意識していないというのがスミスの言いたいことであろう。この考え方の根底には理神論的世界観が存在する。

## (3) 理神論的世界観

彼は「作用因 (**efficient cause**)」と「目的因 (**final cause**)」を区別する。宇宙を懐中時計に喩えて、スミスは次のように述べる。「懐中時計の歯車はすべて、それらが作られた目的すなわち時を示すということに、感嘆すべき適合されている」。だが、時を示すという意欲と意図を歯車が持っているわけではない。その意欲と意図は「時計製作者に帰属」するものである。それと同じように「宇宙のどの部分においても、我々は、諸手段が、それらによって生み出すことが意図されている諸目的に、もっともみごとな技巧で適合されているのを見る」。この場合、「意図」は「宇宙の偉大な製作者」に帰属する。

人間社会も同様である。「社会の一般的利害への考慮」は「最高存在」が意図するものである。人間は「見えざる手」に導かれて「最高存在」の意図を実現する。人間は「作用因」にしか関与しない。我々は「同感」という感情に基づき、社会のなかの経験の積み重ねにより「公平な観察者」の目を胸中に形成する。この客観的な観点に基づく「自己抑制」により、「意図せざる結果として」「社会の一般的利益」が実現されるのである。

## (4) 「適宜性」感覚生成のメカニズム

では、「作用因」はどのようにして「宇宙の偉大な製作者」の「意図」を実現す

るのであろうか。「適宜性」の感覚はどのように生み出されるのであろうか。スミスが論じた秩序生成メカニズムは次のようなものである。人間は「想像上の立場の交換」により他者に「同感」し、他者の自分に対する「同感」を喜ぶ。この「同感」という感情に基づき、社会の中で経験を積み重ね、「見えざる手」に導かれて「公平な観察者」の目を胸中に形成する。

#### (5) 『道徳感情論』の意義と問題点

「想像上の立場の交換」により、他者の立場に立って自分を客観的に眺めるということは、社会的秩序の生成において重要な要因である。環境問題などを考えると、「想像上の立場の交換」により「将来世代」の立場に立ってものを考える、ということは今後益々重要となって来るであろう。「想像上の立場の交換」による「同感」という要因を「作用因」として、道徳観、倫理の生成メカニズムを明らかにしたことはスミスの貢献であろう。だが、この論理展開にはいくつかの疑問が残る。

第1の疑問は、「想像上の立場の交換」により他者と同じ感情を持つことははたして可能だろうかというものである。スミスは、観察者の経験や観察者の身近な人々の経験の観察から、当事者の感情を想像する。しかし、類似の経験が異なる人々に異なる時点で類似の感情を産み出すかどうかは不確定である。その時、自分が想像した他者の感情に関する仮説を、実際のコミュニケーションによって確認する、という議論が欠けている。実際に当事者と話してみたら、彼の感じていたことは想像していたものとは全く異なっていたということはよくあることである。スミスの議論は、あくまでも「観察」と「想像」が中心で、言語によるコミュニケーションという視角は稀薄である。

第2の疑問は、観察者が見知らぬ第三者の行為を見るときに、「周辺の」人々や他の人々と「同じ見方で見ている」ことが、公平で中立的な観察者の見方で見ていることになるかどうかは分からないという点である。この問題は、「称賛への愛好」と「称賛に値することへの愛好」の区別とも関連する。初版では、我々は周りの他者の客観的な見方を模倣することによって、公平な観察者の見方を心の中に設けるようになると論じていたが、第6版では、周りの他者の客観的な見方にも2種類あることが論じられている。一般庶民（富と地位の感嘆者）の見方と賢者（英知と徳の感嘆者）の見方である。

この第6版の変更は、スミスの道徳感情生成論に重大な変化をもたらした。一方で、スミスは「富への道」を社会の重要な規範として認めるようになった。「慎慮の徳」の評価を高めたと言うこともできる。この立場は『国富論』で採用され

ている見方である。しかし、他方で、「富への道」を積極的に評価するようになったため、「道徳感情の腐敗」という問題を生み出すことになってしまった。客観的な見方を身につけることができたとしても、その見方は「富と地位の感嘆」に止まり、「英知と徳の感嘆」にはつながらないかもしれない。公平な観察者の見方が「称賛への愛好」に止まり、「称賛に値することへの愛好」までには至らないという問題が発生したのである。

第3の疑問は、この「道徳感情の腐敗」問題を打開するために、第6版では「宗教」が強調されている点についてである。初版では、「他者」の「我々」への同感が「我々」を喜ばせる、すなわち、「称賛への愛好」から「一般的規則」を導き出していた。しかし、第6版になると、「称賛への愛好」だけでは「富と地位の感嘆」に止まり、「道徳観の腐敗」が生じてしまう。そこで、この版では、「自然は彼に、是認されることについての欲求だけでなく、是認さるべきものであることについての欲求」を「授けておいた」（同上：382）という議論が展開されている。この欲求、すなわち、「称賛に値することへの愛好」は、全知全能の「最高存在」からの是認への欲求と言い換えることもできる。「不当な批判」に対して賢人は、「来るべき世界」において「正確な正義」が行われ、「称賛に値する」行為は報われるに違いないと信じるのである。したがって、「公平な観察者」とは人々の心の中に内在化された「神」であると考えることができる。

この考え方は、宗教心が道徳倫理の基礎となり、法秩序と経済発展を促進するという興味深い議論に発展していく可能性を持っている。しかし、他方で、この宗教心による道徳感情の基礎付けは、ホブズ問題の解決には重大な支障を来す恐れがある。なぜならば、この議論は、一つの宗教を信じる共同体内の倫理的秩序生成には効果を発揮するが、異なる宗教（あるいは宗派）を信じる共同体同士の争いを如何に解決するのか、という問題には逆効果だからである。あるいは、一つの社会の中で異なる宗教（あるいは宗派）を信じるグループ同士が深刻な対立状態にあるときにも、この議論は通用しないだろう。公平な観察者が人々の心の中に内在化された神であるとするならば、異なる神を信じる者間で共通の「公平な観察者」の見方を生み出すことは困難であろう。

## 2. ヒュームの秩序生成論

### (1) コンヴェンションの生成

スミスの道徳秩序生成論は、想像上の立場の交換による「同感」原理に基づくものであり、背後には理神論的な世界観が存在していた。「見えざる手」に導かれて道徳秩序が生み出されると考える。この議論とは異なる系列の議論がある。

それが、ヒュームのコンヴェンション生成論である。その内容は次の通りである。①人間が必要とする生活手段には「希少性」がある。②人間は利己的で、他者に対する「寛大さ」にも限界がある。この2つの条件が結びつくと、人間の間には利害の衝突が起こる。ホッブスが指摘した「万人の万人に対する戦い」という状態が生まれる。人間は自然状態では、言い換えれば「社会」なしでは深刻な利害の衝突の問題に直面する。この深刻な状況に対して、ホッブスは「死への恐怖」という情念と「理性」による「契約」という解答を出した。スミスは、胸中にある「公平な観察者」の目による倫理的自己規制という解決を用意した。

ヒュームの解答は、交友と会話における感情の交流が試行錯誤を経てコンヴェンションを生み出す、というものであった。では、この感情の交流はどのようにして生まれるのだろうか。ヒュームは、人々の感情が交友や会話における声、身振り、表情などの記号を通じて相互に伝わり、感情の共有が生み出されると論じる。スミスが「想像上の境涯の交換」を強調するのに対して、ヒュームは「一般的言語」によって「会話」すること自体が「一般的観点」形成に役立つという点を強調する。「言語」に代表される記号を用いて他者とコミュニケーションを繰り返すことがコンヴェンション形成の重要な契機なのである。

結局、戦争を中断して商取引などを通じて交際と会話を積み重ね、相手に対する寛大さを強め、共感原理に基づき共通の利害関係という信頼関係（慣習）を徐々に生み出していくというのが彼の解答であった。その際、道徳観、正義感の基礎となるのが、①我々にとって有用な性質、②我々に快い性質、③他者にとって有用な性質、④他者の快い性質、の4つであった。スミスが理神論的世界観に基づき、「社会の一般的利害への考慮」は「最高存在」が意図するものであり、人間が意図し関与するものではないと考えたのに対して、ヒュームは、「社会の一般的利害への考慮」に人間が関与すると考えた。その関与の形態が、共感原理に基づくコンヴェンションの生成であった。

## （2）法制度の生成

コンヴェンションのより具体的な形態である私的所有権の法制度に関しては、ヒュームは次のように論じる。人々は社会の中で様々な取引に関与し、様々な人間関係を取り結んでいるが、この中から様々な利害の衝突が生じてくる。この利害の衝突を解決するために訴訟が行われ、判決が出されていくのだが、この訴訟、弁論、判決の積み重ねも一種の会話であり、交際と会話を通じてコンヴェンション（慣習）が生み出されるということは、訴訟と判例の積み重ねを通じて一般的な規則（法）が生み出され、その規則（法）が歴史の推移とともに修正され進化

を遂げていくということの意味する。

ヒュームの制度生成論は、利害の衝突という問題を抱えた多様な人間が、交際と会話（抗争と訴訟）を通じてコミュニケーションを重ね、試行錯誤の末に慣習を生み出し進化させていくという、内生的な制度進化論であったといえよう。

むすび

スミスの世界観はヨーロッパ思想の主流を継承したものであり、プラトン、ストア哲学に代表される合理主義的創造神思想を継承する理神論的世界観の強い影響下にあった。このため、宇宙や人間世界を機械になぞらえ「最高存在」が外から創造したものであると考えていた。したがって、「公益を実現する」という意図や目的は「最高存在」に属する問題であって、世界の中に存在する人間には知らされていない。人間はあくまでも「見えざる手」に導かれて公益を実現するのである。そのメカニズムが「万有引力の法則」であり「市場機構」であり、「同感」から倫理が生み出される機構なのであった。このため、スミスの世界観は、市場に任せれば公益が実現される、倫理は自生的に生成するという予定調和的な性格を持っていた。だが、スミスの倫理生成説は晩年になって行き詰まりに直面する。彼は「想像上の立場の交換」による「同感」原理に基づき、他者からの是認を受けることへの欲求から「公平な観察者」の眼が人々の心の中に形成されると説く。だが、この議論を突き詰めると、「称賛への愛好」から「富や地位への喝采」が社会規範として生み出されることは解けるが、「称賛に値することへの愛好」や「徳への喝采」は宗教心を導入しないと解けないという問題に直面することになったのである。

これに対して、ヒュームの世界観は、エピクロス派や懐疑論哲学のようなヨーロッパ思想の中では異端の流れを継承するものであった。世界は「最高存在」が外部から設計して創造したのではなく、世界の内部に存在する互いに利害が衝突する多様な主体同士が、交際と会話、抗争と妥協、訴訟と弁論などを積み重ねることによって、徐々に公益に資する法制度を形成し進化させていくと考える。スミスが機械論的で歴史性を欠く普遍法則を考えていたとすると、ヒュームは生物学的で進化論的な制度の生成進化を考えていたと言える。その意味で、ヒュームの世界観と制度生成論は、進化論的な制度主義経済学の思想的源流である。

多様な個人や国家が交際や会話を通じて「共感」し、自己利益だけでなく公共利益に資する制度を生み出していくという考え方は、現代の多元的世界において重要性を増しつつあると思われる。その意味で、スミスの「同感原理」も「コミュニケーションの論理」として鍛え直していく必要があるのではないだろうか。